



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 リスニングからの導入

巻頭エッセイ
歌うように話す 林 望 01

特集 授業におけるリスニング指導 見上 晃 02
 入門期におけるリスニングからの導入 酒井英樹 05
 リスニングからの題材の導入 重松 靖 08
 リスニングによる言語材料の導入 根岸雅史 10

連載 英語教師のための基礎講座 Team-Teachingの基礎・基本2 渡邊時夫 12
 評価クリニック 気になるテスト作り 根岸雅史 14
 授業レポート 「話すこと」の指導と評価[2] 原田尚孝 16

小学校英語 Just Now
 英語活動ができる担任に！—小学校教員研修の実践例— 三浦邦子 19
 単語の文化的意味 64 large / small 森住 衛 21

Essay
 Language and culture: Teaching methods and materials Thomas Hardy 22
 英語教師のリソース 「超録」を使ってスピーキングテストデータ管理 今井裕之 23

AROUND THE WORLD 環境に優しい言語学のすすめ[2] 呉人 恵 表紙裏
 表紙写真について ハルツームのバスターミナル 紺野正典 表紙裏

Vol.6

FALL 2004
SANSEIDO

貧しい言語・
豊かな言語という幻想

フィールド調査に行くとよく、「なんでコリャーク語なの？」と聞かれる。大体は適当にやり過ごしてしまうが、質問にやけに挑発的な響きが込められたりすると、売られたけんか？をつい買ってしまうことがある。

その人は、コリャークが暮らすツンドラで20年近く毛皮獣を狩ってきたロシア人だった。冬になると、毛皮を現金に換えて家族の住む町ノボシビルスクに帰っていく。その人が言った。『コンピュータ』も『電話』もない貧弱な言語を研究してどうするんだ？』私は苦笑いをしながら答えた。「そういうロシア語の『コンピュートル』も『テレフォン』も借用語じゃない？大事なのは、必要なものを表すのに十分な語彙があるってこと。コリャークにはコンピュータも電話も必要ないだけよ。」

たしかに、シベリアのツンドラでトナカイ遊牧に従事するコリャークにはコンピュータも電話も無縁だ。しかし、そこで生きていくために必要なものとそれらを表わす語彙は十分揃っている。シベリアというと不毛、酷寒などマイナスイメージがつきまとうが、実際には、家畜トナカイ、縦横に走る大河川の魚、森林の野生動物など動物資源にも恵まれている。ベリーや球根などの植物資源も重要な食料源である。コリャークはこれら多様な自然資源を巧みに組み合わせ、過酷な自然条件に適応対処してきた。そのことが、自然資源を満遍なく表わす豊富

呉人 恵 Kurebito Megumi (富山大学人文学部)



トナカイの角切りは夏の大切な遊牧作業のひとつ

な語彙にも反映されている。

もちろん、語彙が豊富というだけではない。そこには、自然資源に対するきめこまやかな観察の跡が読み取れる。たとえば、生殖可能性を基準に分類される家畜の名称。性別による名称の違いがないことから、生殖活動が始まっていないことがうかがえる0歳児、生殖可能な成畜オスと認められるのは、名称に「本当の」という修飾成分がつく4歳からであることなどが、これら語彙の分析から自然に炙り出されてくる。

80年代後半からのベレストロイカを境に、急激に荒唐していくコリャークの生活を、おそらくはコリャーク語を通して批判しようとしたその人の気持ちもわからないではない。だが、政治とか経済とかといった価値観から解放され言語を等しく眺めるためには、環境が多様であるように、生活も、そしてそこから生まれる言語も多様なのだということを、まずは脳みそにとことん刷り込むことから始めるしかないだろう。

表紙写真
について

ハルツームのバスターミナル

紺野 正典 Konno Masanori (東京都足立区立江南中学校)

NEW CROWN 3年の教科書に載っている国、あのスーダンが春休みに訪れた。写真“Vulture and a Child”のイメージが強いスーダンだが、首都ハルツームの市民生活は比較的安定しているように見えた。人々は皆私に親切で、日本にはとても良い印象を持ってきていた。また、走っているのはほとんどが日本車だった。首都のある北部はイスラム色が強いので英語は思いのほか通じず、アラビア語が主流だった。スーダンに着いたのは夜だった。

私はスーダン人に道を尋ねた。とても親切にしてくれた。その彼に会いに、次の日彼の営む土産物店を訪れた。店には旅行者などはほとんどおらず、経営は苦しいようであった。私は、そんな彼からスーダンのことをいろいろと学んだ。やはり、20年以上続く内戦の痛ましさが一番感じた。ほかにもたくさんのスーダン人と出会い、話をしたが皆優しく、日本から来た私を歓迎してくれた。夕方、私が宿泊している安ホテルに戻り、窓を開けた。するとバスが

楕円形に隙間もないぐらいにとまっている光景が目に見え飛び込んできた。夕方になると、バスがあちこちから戻って来るのだ。首都ハルツームも夕刻になると気温は30度ぐらいになっていた。首都を少し離れると、そこは砂漠で日中は40度を軽く超える。4月から7月までスーダンでは夏休み。なぜって？ この時期気温は、50度以上に達する。学費を稼ぐため、働きに出かける子どももいると聞いた。





歌うように話す

林 望 Hayashi Nozomu

恥ずかしながら、高校生のころ英語は不得意の科目の一つだった。どうもあのただ模範解答を暗記するだけのような受験英語が好きになれなかったのだ。とはいえ、英語自体は決して嫌いではなかった。

今から四十年も昔、当時はモダンフォークソングが大流行で、ブラザーズフォーやPPMなどの名手たちの全盛期だった。私はたちまちPPMの歌の虜となって、かれらのコピーを試み、ギターを弾き、ハーモニーを聞き取った。今思うと、あの歌の勉強が、私のその後の英語を大きく規定したのである。

それから二十年ほどのち、私は、縁あってイギリスへ留学することになった。当時の私は純然たる日本古典の文献学研究者であって、英語にも英国にも毫も興味がなかった。友人たちのなかには、英会話の学校に行けとか、リンガフォンでも聞いて勉強しろとか、あれこれ助言してくれる人があったが、私は何故かそんな必要はないような気がした。

さて、いざイギリスに単身渡ってみると、もちろん最初は全然なにも分からない。しかし、よくよく聞いてみると、英語にも高雅なのと粗野なのがあることがすぐ分かった。母語にうるさい人間は外国語にも敏感なのであろう。そこで、どうせ学ぶなら格調高い英語をまねて学ぶに如かず、とそう考えた。

すると、ロンドンではロンドン大学の碩学ローゼン博士の家に下宿し、ケンブリッジでは名高い作家ルーシー・ボストン夫人の館に、偶然住むことになった。つまりそういう幸いが私にあったのであろう。

このとき、よく聞き、よくまねる、というPPMで培った能力がどれほど役に立ったかしれぬ。

そもそも英語の歌は、英語が本来もっているイン

トネーションや、強弱のリズム（詩のタームでいう metre）に極めて忠実に作曲されている。それはクラシックでもポピュラーでも変わらない。そうして個々の語の発音よりもそういう全体の流れの抑揚やリズムが英語を英語らしく話す要諦なのである。

私はPPMをまねるうちに、そのことを自然に身につけたのであつたらう。だからイギリスに渡って、上流イギリス人の英語を子細に聞き分けて、英語を英語らしく話すことが別に難しくもなくてできた。

イギリスに渡って半年もすると、いつのまにか相当のスピードで話せるようになったが、そういうことのためには、この「歌うように話す」ということが実際にはずいぶん役に立った。

思うに英語の授業でも、美しいイギリスの歌曲や民謡をピーター・ピアーズ、イアン・ボストリッジ、トマス・アレン、などの名手が歌っているのを聞いて忠実にまねるとか、アメリカ英語だったら、やはりPPMのようなもっとも標準的で上品な（！）東部米語を「お手本」としてまねて歌ってみるとかするとよい。歌は楽しいから、暗記も全然苦にならぬ。ただただ楽しく歌っているうちに、すすすいと英語の発音やらエロキューションなどまで身につけてしまうと、私は思うのだが、ただしそれで受験に受かるかどうかは、保証の限りでない…。

はやし のぞむ

1949年生。作家・書誌学者。『イギリスはおいしい』で日本エッセイストクラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』で国際交流奨励賞を受賞。エッセイ、小説、詩、能楽等、著書多数。最新刊『おちさん—The Man—』。http://i.am/rymbow

特集 リスニングからの導入

授業における リスニング指導

見上 晃

(拓殖大学)

リスニングによって指導を 行う基本的考え方

実践的なコミュニケーションを指導の目標としたとき、最初に指導しなければならないのはリスニングである。生徒にはできるだけたくさんのインプットを与えたい。このとき文字で与えるのでは時間がかかりすぎる。文字は受け手である学習者のペースで読むことになるからである。

いつまでもある文字に比べて、音声はその場で消えていってしまう。文字は消えていかないので、学習者は自分のペースで理解していけばいい。しかし音声は発話した端から消えていってしまうので、聴取者は自分のペースではなく発話者のペースで理解していかなければならない。相手の速いペースに合わせなければならない。実際の会話でも、ゆっくり話してくれ、と言ってもすぐに元のスピードに戻ってしまうことが多い。つまり音で英語を導入することは教授者のペースで理解させていくことになり、理解の速度を教授者がコントロールすることができる。これを利用してできるだけ短い時間で大量のインプットをさせることが大切である。

スピーキングはこの十分なインプットがあってから行なえばいい。自然に英文が口から出てくるようになってから、意味を考えてスピーキングに移行する。さらに学習者が速いスピードに慣れていれば、会話練習も短時間で行うことができる。文字を使ったコミュニケーションも重要であるが「実践的コミュニケーション」という場合、従来よりも音声によるコミュニケーションに重きが置かれる。

また私たちは（特に私は最近）、自分の行動を口に出していることがある。「最初に本屋に行って、

その後でデパートに寄ればいい」、などと言っている自分に気がついて恥ずかしくなることがある。しかし文字でこのようなことはない。気がついたらこれからの行動をメモに書いていた、などということは聞いたことがない。こう考えると私たちの思考というのは音声に近いのではないだろうか。「英語で考える」ということがあるが、このとき正しい音声が出てこない場合は、母語の発音などで代用して考えているのではないだろうか。apple と言いたいのにそれが言えないのでアップルと言っている。apple のような実際の英語音ではなく、アップルのような母語の発音を基礎とした疑似英語音を用いるなら、思考用の疑似音と発声用の音声を使い分けるというさらなる負荷を与えていることにならないだろうか。いったん頭の中に正しい音像ができあがればどう発音したらいいかを考える必要はなく、何を言いたいかを考えれば自然に発音できる。口から出る文は考えなくても自然に発音できようように繰り返し口頭練習する必要がある。そしてさらに意味を考えれば言いたい文が自然に出てくるように繰り返し練習することも必要である。

ヒアリングかリスニングか

以前はヒアリング教材だとかヒアリング指導といったことばをよく聞いたが、最近はあまり聞かなくなった。一般にhear という動詞は「(聞こうとしなくても)聞こえてくる」という意味でとらえるため、ヒアリングは指導できないということであろうか。

脳の研究をしている人の中には脳は並列処理をするので、それを真似たコンピュータの並列処理モデル(PDP モデル)を作りその動きから脳の働きを探っている人たちがいる。例えば、PDP モデルに

動詞の過去形を教える。最初に規則変化する動詞を学習させ、定着したところで不規則変化する動詞を加えていく。するとこのモデルは *taked* のような人間と同じ間違いを犯す。しかもご丁寧に今まで学習できていた *look* の過去形を間違えたりする。

このことからこの PDP モデルは人間の脳の働きを再現していると言ってよいと思われる。そこでこのモデルにア、イ、ウ、エ、オの音声を教えたとする。その後で [æ] を導入するとアだとか、エだとか答える。[æ] は出てこない。何度やっても同じで正しい答えは出ない。そこで [æ] を導入した後、アやエと答えたら間違いを指摘し、繰り返し練習させると [æ] を正しく答える。

このことから人間の学習者（中学生）の中にも、せっかく正しい発音を指導しても自分が間違っていることを繰り返し指摘しないと自分が誤っていることが分からないでいるケースがあると考えられる。

古く構造言語学の時代にはこのような練習はよく行われた。LL (Language Laboratory) の初期の利用法はこのような単音の聞き取りであった。ミニマルペアを繰り返し聞き、違いを聞き取る練習をした。このためか構造言語学の時代に LL で学習した学生の中には、それ以前より音を正しく聞き取る者が多く見られた。

私はこのような音そのものを聞き取ることをヒアリングと呼ぶ。最近ではリスニング（意味を考えて内容を理解する）指導が中心であるが細部にわたる聞き取りを行う場合、ある程度はヒアリング指導が必要であると思われる。

このヒアリングに比べてリスニングでは、音以外のいろいろな条件を考えながら総合的に「わかる」ことを目指さなければならない。音以外に文法、語法、状況、人間関係といったものが考慮されなければならない。このことは「予測」することであり「話の流れを読む」ことでもある。折に触れて色々な側面から「理解」することを指導する必要がある。

授業はリスニングで導入する

では授業でもヒアリングの指導から行うのか。時間が許すならそれもよいと思う。しかし多くの場合、授業時間は不足しがちであるので無理にヒアリング

から入ることはない。音の識別は徐々に行えばいいし、母音については全部を完全に習得する必要はない。もともと母音は地域的、社会的な違いが大きい。外国語として学習する日本人の場合は最低、日本語の母音と [æ] と [ə] でいいのではないだろうか。子音はそうはいかないが日本語にない子音を中心に指導すればいい。

授業導入の要点

これらを念頭において、授業は以下の点に留意して組み立てるのがよいのではないだろうか。

1. 聞いた内容を口頭で繰り返させる

このことで教師は正確に聞き取れたか、誤りがあったかがわかる。誤りがあれば指摘する。ただコーラスリーディングのような場合には1、2人の誤った発話は全員の音声の中に埋もれてしまう。できれば個人で繰り返させて誤りを指摘するようにすることが望ましい。同じことを何回繰り返しても「誤りだ」、と学習者に指摘しない場合には正しい学習は行われなと思うなくてはならない。

2. 繰り返すことで英語のリズムに慣れさせる

英語にはリズムがあることは頭ではわかっていても、実際には身につけていないことが多い。たくさん文を繰り返し練習する中で、全体として英語のリズムが身につけていく。1、2個の文を繰り返してもリズムに乗ってこないことが多い。できるだけ多くの文を言わせることが必要である。日本人の英語が理解してもらえない場合、個々の発音が悪いというよりは、全体としてリズムが英語になっていないことが多い。日本語の高低のアクセントを英語の強弱のアクセントに換え、さらに強と弱が作るリズムを英語らしくしていく必要がある。基本的に名詞（代名詞を除く）、動詞（be 動詞や助動詞を除く）、形容詞、副詞が強く発話され、それ以外は弱くなること、そして意味によってはこのルールが崩れることを身につけるように指導しなければならない。ただ、このルールだけを覚えさせても実用にはならないので注意して欲しい。

3. 繰り返し練習させて、教科書に出てきた文すべてをできる限り暗記させてしまう

教科書で出た文は片っ端から全部覚えようと言っても、生徒はなかなか覚えようとはしない。そこで教師が教科書の文に近いパターンの文を何度も繰り返させれば全体を覚えるし、また疑問文や否定文を作成したり、質問と応答などを繰り返して同じ文を何回も口に出すように配慮すれば、無理に暗記させるよりも記憶が容易である。中学生は特に暗記が得意な時期であるので、このようにすればたくさんの文を覚えてくれる。特にリズムつきで覚えたものはリズムが出るだけで文が口をついて出てくるようになる。このためには無理に難しい文を言わせる必要はない。1, 2個の単語を入れ替えただけの文をいくつも練習させればよい。

4. 練習は難しくする必要はない

メカニカルなものを最初に行い、心理的な圧迫感を取り去ることが必要である。置き換え練習などでは主語を次々に代えて動詞の変化などを考えさせる練習などがあるが、そのような複雑な練習をする必要はない。単純に主語を置き換えていけばできるような練習で十分である。置き換えを重視するのではなく、ターゲットにする文を繰り返して練習させるようにする。文の基本構造を習得させる。教科書には普通紙面の関係でたくさんの同じような英文が並んでいることはない。教授者は授業に行く前にいくつかの文を作って準備しておくとうい。さらにもし時間があればその後で置き換えだけの練習を行えばよい。すらすらと出てくるようになったらQ&Aなどを行って意味とその文を関連付けてやればよい。この作業は生徒同士のペアワークで行うことができる。

5. 音声での指導でスピードが遅い場合は繰り返し指導してスピードをつけるようにする

一般に教師は生徒が正しく言えれば練習はそれで十分とすることが多い。しかし実践的コミュニケーションをつけることを考えると、たとえ正しい文が言えてもスピードが遅いなら「それでは遅い」と繰り返し指導した方がよい。速く発話することでリダクションやデリションのような音声の変化を自然に

身につけることができる。したがって速く発話できても全体の文のリズムを乱してまで速くさせることはない。生徒があまり速く発話することに注意を払いきる場合には、教師が意図的にゆっくりとリズムをつけて言わせる練習も考えられる。英語のリズムに乗った自分に心地よい速度を身につけさせたい。

6. 速い文を聞き取ることができない

生徒の発話が遅いのではなくテープなどの速い文が聞き取れないのであれば、テープレコーダなどについているスピードコントローラを利用する。学習者に任せると速い発話の文をコントローラを使ってスピードを遅くして聞いたりする。しかし遅いものを何回聞いても速いものが聞き取れるようにはならない。使う場合には、録音時に遅いスピードで吹き込まれたテープのスピードを速くして聞き取る練習をさせる。録音時に速く読まれたものは音変化を伴う。これを聞き取るのは難しい。すでに音が変化したりなくなったりしているからである。速い英文を聞き取る練習をさせるためには、音変化のないゆっくり読まれた英文をスピードを上げて聞き取る練習をさせよう。

以上のような練習を通して速度をつけていけば色々な場面で時間を節約することができる。「考える」ことの指導は必要だが、本来考えなくてもすらすらと言えなければならぬ英文を言うのに無駄に時間を使って練習しては実用にはならない。できれば授業時間全体の中で学習者が英文を言っている時間を3分の1は取りたい。これはかなりの時間である。あいさつも最後のまとめもすべて含んだ数字である。授業の中心となる時間のほぼ半分をとることになる。英文を次々にぶつけて言わせるようになると、「英語が自然に出た」と報告があるかもしれない。子どもたちは「できるようになる」ことが大好きである。授業で練習を繰り返し、「自然に英語が出てきた」と言われるのは英語教師にとって何よりもうれしいことではないだろうか。その後で本文の内容についてじっくりとみんなで考える。こちらは学習者の知的レベルを上げるためにもじっくりと考える時間をとりたい。そのために教科書は題材に力を入れているのだから。

特集 リスニングからの導入

入門期における リスニングからの導入

酒井英樹
(信州大学)

1. はじめに

自己紹介を聞いているときに、Australia が聞きとれたとしよう。そのときに、「あ、Australia と言ったな。オーストラリアのことだ。へえー、オーストラリアから来たのかな」と思うかもしれないし、「たくさん言っていたのに、Australia しかわからなかった。なに言っているのか、少しも理解できなかった」と感じるかもしれない。導入期では、生徒が「聞き取れたところがあるぞ」と理解できた喜びを感じることが大切である。英語の力が伸びてくるにつれて、わかるところが少しずつ増えていく。この進歩を自覚できれば英語を学ぶ動機も高まる。わからないところがクローズアップされてしまうと、英語の学習が進むにつれてわかるところが増えているにもかかわらず、英語はどんどん難しくなっていくので、わからないところはいっこうに減らない。減少するのは学習意欲ばかりとなってしまう。

本稿では、聞き取れたことをもとに英語の全体の意味を理解（推測）していくことに焦点をあてた指導と、聞き取れた部分だけにとどまらずに聞き取れなかったところを学んでいく指導を紹介したい。

2. 聞きとれるところを中心に

(1) Touching Game

小学校の英語活動では、身の回りのことがらを扱うことが多い。絵やジェスチャーなどの助けを借りながら、英語を理解する力をつけてくる。例えば、先生の話す英語などを聞いて話題にあがっている絵を探す Touching Game は、よく使われる活動の1つである。NEW CROWN BOOK 1 を使って、例を示そう。

活動は、Let's play the Touching Game! Please open your textbooks to page 6. Are you ready? という英語で始まる。Where is A? (Please touch A. / Can you find A?) という指示を聞いて、生徒は A を指差すのである。生徒が正しく反応しているかを確認するために、Show me. と言って、教科書を持ち上げてみせるように求めたり（必要なら先生が教科書を持ち上げてジェスチャーでどうするか示す）、What color is A? Red? Yellow? Brown? (Yellow.) と色を尋ねたり、Where is A? On the bed? On the door? On the desk? (On the door.) とその対象物の場所を尋ねたりすることができる。また、A is hanging on the door. / A is a part of the letter holder. と描写を付け加えてもよい。

(2) 活動のポイント

このリスニング活動のポイントは、絵を探すという目的のために英語を聞く点であり、質問やヒントの英語を聞きながら必要な情報を得ることである。未習であるからといって、「タッチングゲームをしましょう。先生がこれから英語を言うから、指差してください。1 番め、A。できましたか。2 番め、G。…」というように指示を出すのはおもしろくない。乱暴な言い方をしてしまえば、Where is A? Please touch A. Can you find A? という英語を聞いたときに、生徒が聞きとる必要があるのは A という語だけであって、Where や can を使った疑問文について理解することを必要としない。

未習の表現を含む英語を生徒に与えることに不安になる先生方がいるかもしれない。英語の指示に対して生徒が適切に反応しているかを確認することは大切である。また、(a) 繰り返したり、言い換える、

(b) 言語外の情報 (ジェスチャーや絵, 実物など) を利用する, (c) 表出させるときにはインプットを十分与える, という3点に留意するとよい。

Touch A. Can you find A? Who can touch A? Where is A? Where can you see A? などと言い換えることで, 重要な語句 (上記の例でいえば, A という語) の音が繰り返し耳に入ってくる。ジェスチャーが, 理解を助けることもある。Show me. と言いながら, 先生が教科書を持ち上げて, 指差すジェスチャーをする。このことによって, Show me. と言われたときに, どんなことをすればいいのかを理解することができる。いったん意味が理解できれば, 次の機会には先生のジェスチャーは必要がない。英語の指示だけで, 生徒は反応できるようになる。時には, 英語を使って反応させてもよい。表出させる前には, 十分にインプットを浴びせることが重要である。What color is A? と聞かれて生徒が答えられなかったとき, 質問の意味がわからなくて答えられないのか, 質問の意味がわかるのに答え方がわからなくて黙ってしまったのがわからない。What color is A? Red? Yellow? Brown? というように, 選択肢を与えることによって, ハードルを低くすることができるし, 英語のインプットを与えることができる。

このようにすることによって, なんとか英語で活動ができるという自信を持たせることができるであろう。また, A という語を聞きとることができた生徒は他の語句 (Please touch... や Can you find... ? など) に注意を向ける者も出てくるはずである。Please touch. と Can you find... ? ってどう違うのか, と生徒が質問してきたら, 「さわる」というジェスチャーと, 目の上に手をあてて何かを探し, ようやく見つけ出すというジェスチャーを使いながら, 意味の違いを説明してあげてもよい。

3. わかるところをもとに英語を理解してから, わからなかったところを学ぶ —新出文型の導入—

(1) リスニング活動からの導入

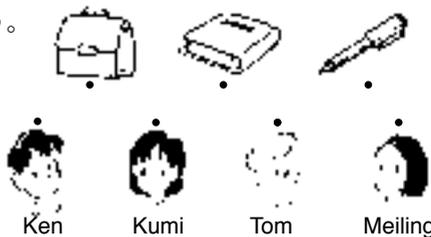
新出文型の仕組みや意味などを学んだ後で, 聞く練習や話す練習を行うという展開が一般的な指導手順であろう。ここでは, 発想を変えて, まず新出文

型を含む英語を聞いて内容を理解した後で, 新出文型の仕組みや意味の学習や話す活動を行うという手順を紹介したい。

例として, *NEW CROWN BOOK 1* の LESSON 1, セクション 2 を取り上げたい。このレッスンは, 健がメイリンやトムに自分の部屋を紹介する場面である。新出文型は, Is this your desk? という疑問文とその答え方である。また, It is my brother's computer. というように, 所有を表す表現も新出となっている。

このレッスンの導入として扱いたい活動が, LET'S COMMUNICATE! の「2 だれのかな?」である。

[1] 先生が落とし物の持ち主をさがしています。英語を聞いて, それぞれだれのものか, 線で結んでみよう。



<スクリプト>

Teacher: Ken, is this your pen?

Ken: Yes, it is. It's my pen. Thank you.

Teacher: Meiling, is this your book?

Meiling: No, it isn't. It's Kumi's book.

Teacher: Kumi, is this your bag?

Kumi: No, it isn't. It isn't my bag. It is Tom's bag.

Teacher: Tom, is this your bag?

Tom: Yes, it is. It's my bag. Thank you.

(下線筆者 新出文型や語句)

まず活動を行わせる。新出文型や語句が含まれる英語を生徒に聞かせ, 落とし物とその持ち主を結ばせる。意外に多くの生徒が正解するだろう。

次に答え合わせをしながら新出文型を浴びせる。A-san, you are Ken. Is this your bag? とかばんの絵を指差しながら質問する。生徒は, Yes. か No. で答えるだろう。先生は, That's right. No, it isn't. と答え方の例を示しながら, Is this your book? と次の絵について質問する (A さんに再び尋ねてもよいし, 別の生徒に質問してもよいだろう)。No, it isn't. と先生の英語を真似して答える生徒がでてく

るかもしれない。先生は、再び、You're right. No, it isn't. と確認してから、最後の絵について Is this your pen? と質問する。Yes. という生徒の答えに対して、Yes, it is. It's your pen. と返答し、さらに、クラスに向かって、This is Ken's pen. と答えを提示する。ここで生徒が正解したかどうか確認するのである。同じように、久美やトム、メイリンに関して答え合わせをしながら、新出文型を含む英語を十分に聞かせる。最後に、新出文型を含む英語の問題を聞いて理解できたことをほめてあげたい。

ここで新出文型を確認しよう。最初のやり取りをもう一度聞かせる。

Teacher: Ken, is this your pen?

Ken: Yes, it is. It's my pen. Thank you.

気づかせるポイントは、(a) どんな場面なのか、(b) どんな音が聞こえたか、(c) どんな意味なのか、という3点である。

(a) どんな場面なのか（落とし物は何か、だれとだれが話しているか、など）、既習の知識を使いながら確認する。penが繰り返し聞こえてくることから、penについて話していることがわかる。また、教師が最初にKenと呼びかけていることや、教師の英語のイントネーションが上がっていることや健がYes. と答えていることから、教師が質問をして、健が答えていることを知ることができる。

(b) 次に、どんな音が聞こえたかを確認する。例えば、What did the teacher say? "This is your pen?" と発問してから、生徒にもう一度英語を聞かせる。「おや this is のようだけ少し違うようだ」というように is と this の語順に気づかせることができる。

(c) 最後に、意味の確認は訳を与えることではないという点に注意したい。Is this your pen? と聞かれたときに、「これはあなたのペンですか」と日本語訳が思い浮かぶだけでなく、「ペンを拾ってくれたんだ。Yes. Thank you.」と適切に反応することが重要である。

新出文型の確認の後で、テキスト本文の英語を聞かせる。そして、ピクチャーカードを使いながら、Is this Ken's desk? や Is this Ken's computer? と尋ねて、内容理解を確認する。授業のまとめとして、LET'S COMMUNICATE! の「2 [2] 2人ずつの組

になり、それぞれが上の4人のうちのどれかの役割を選び、例にならって、3つの物について対話してみよう」の話す活動を行わせる。

(2) 活動のポイント

このリスニング活動のポイントは、最初はわかるところをもとに英語全体を推測させることである。例えば、LET'S COMMUNICATE! のリスニング活動で、教師が Meiling, is this your book? と質問をして、メイリンが No, it isn't. It's Kumi's book. と答えているやりとりがある。is this という語順についてはわからないかもしれないが、イントネーションを手がかりにしたり、相手が No. と答えていることから、教師が質問をしていることが理解できる。また、your book と聞かれたことに対して、メイリンが No. と答え、さらに Kumi という名前を言っているの、「久美の本」であることが推測できる。このように、生徒が既に持っている知識を使ってなんとか英語を理解しようとする姿勢がポイントである。

2つめのポイントは、生徒のわからないところを取り上げて、どういう英語が使われていたかを気づかせることである。わかるところをもとに英語全体の意味を推測することは大切であるけれども、わかる部分を増やしてあげることも同じくらい重要である。Meiling, is this your book? という英語を聞いたときに、this is... という英語は既習なので、生徒によっては、Meiling, this is your book? というように聞いてしまうだろう。そこで、This is your book? と言っていたかな、と発問することで、違いに気づかせることができる。一度違いに気づけば、どんなときに This is... や Is this...? を用いるのか、と疑問に思い学習意欲が高まるであろう。

4. おわりに

リスニングからの導入を考えるときに、「わかるところをもとに英語を理解する・推測する」ところから始まり、「わからないところに注目する」段階を経て、新しい英語の表現を学んでいく過程を作っていきたい。生徒がどこまでわかっているのか、をきちんと把握することが、リスニングから導入する指導の成功の鍵になると思われる。

特集 リスニングからの導入

リスニングからの 題材の導入

重松 靖

(東京都国分寺市立第二中学校)

はじめに

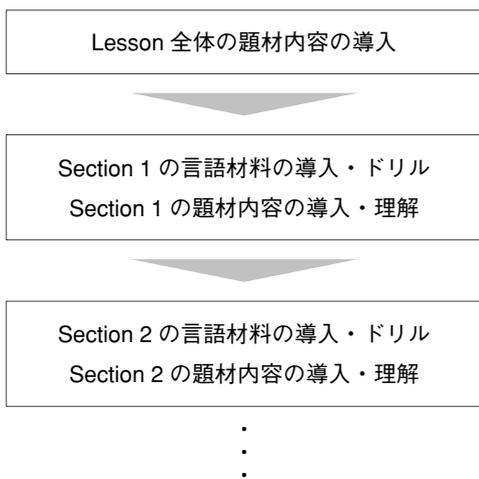
コミュニケーション能力の育成が叫ばれ、英語の授業においてもさまざまなコミュニケーション活動が展開されるようになった。しかし、それらの活動の多くは、言語材料の導入やドリルの段階が中心であり、本文の理解となると旧来の訳読式の授業となることが多い。このギャップの大きさに悩む教師や戸惑う生徒が多いのではないだろうか。

本稿では、リスニングを重視した題材内容の導入、特にレッスン全体のテーマの導入について考え、訳読式からの脱却を図る一歩としたい。

1. レッスン全体の内容導入とは

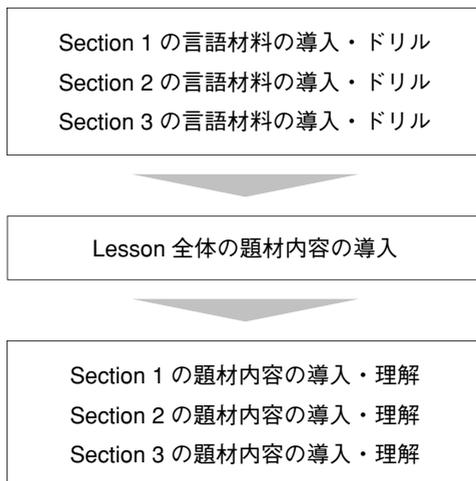
NEW CROWN のそれぞれのレッスンには「環境」「平和」「福祉」など全体を通してのテーマが設定されている。リスニングを中心にそれぞれのテーマを導入することで、学習意欲を喚起し、スムーズに学習活動に入っていくことができるはずである。

一般的には次のような指導過程が考えられる。



この場合注意したいことは、レッスン全体の導入から Section 1 の言語材料の導入がスムーズに行えるかどうかである。同じ絵や写真を用いるなど、自然な流れで言語材料を導入したい。

言語材料の導入・ドリルは生徒の身近な話題を用いたり、ゲーム的要素を加味するなど楽しい活動を展開し、題材内容はじっくりと考えさせたい、という場合には次のような指導過程も考えられる。



BOOK 2: LESSON 6 “Speech—My Dream”, LESSON 9 “Landmines and Children”, BOOK 3: LESSON 6 “I Have a Dream”, LESSON 7 “A Vulture and a Child” などには適した指導過程であろう。

2. レッスン全体の内容導入例

レッスン全体の題材内容を導入した後に、Section 1 の言語材料の導入へと続く例を考えてみたい。

(例1) BOOK 1: LESSON 8 “They Are Partners”

① 動物やペットについて、次のような Q&A を、生徒とする。

・ I like animals. Do you like animals? What animals

do you like?

・ I have a pet. It is a dog. Do you like dogs? Do you have any pets? What pets do you have?

② 木村さんとシンシアの写真を見せ、次のような質問をする。

T: Is this dog a pet?

S: Yes, it is. / No, it isn't.

T: This dog's name is Cynthia and this man is Mr Kimura. She and Mr Kimura live here. They are partners.

③ 同じ写真を用いて言語材料を導入する。

T: What does she have in her mouth? から、電話器を導き出し、She is working for Mr Kimura. She is helping Mr Kimura. を導入する。(以下略)

(例2) BOOK 3: LESSON 3 "Hiroshima and Nagasaki"

① 16 ページにある「原爆の子の像」の写真(ピクチャーカード)を見せ、次のような英文を聞かせる。

T: Have you ever seen this picture? (asks some students) Some of you said, "Yes". In the picture, you can see a girl. She is standing high in the sky. You can see this girl in the Peace Memorial Park in Hiroshima. Have you ever visited Hiroshima? Have you ever been to the Peace Memorial Park? What is the girl holding? She is holding a big *orizuru*. Can you make *orizuru*? (asks some students)

② 次のような質問をして内容を確認する。

Now, please answer these questions.

One: Where is she? (asks some students)

Two: What is she holding? (asks some students)

③ 同じ写真を使って言語材料を導入する。

This girl's name is Sasaki Sadako. Many people in the world read books about her. We are going to read about her. And let's think about the peace. (世界各国で発刊されている本の写真と本を読んでいる久美のピクチャーカードを見せ、) Kumi is interested in the story about her, and she is reading the book. (本を読み終えた久美のピクチャーカードを見せ、) She has just read a book. を導入する。(以下略)

3. セクション単位の内容導入

各セクション本文の内容理解の導入では、次の2つの方法が一般的である。

(1) 教師による Oral Introduction

Oral Introduction とは、Harold E. Parmer が提唱した Oral Method における新教材の導入方法である。Oral Introduction では、教科書の本文の内容をピックアップカードや図を用いたり、実演したりしながら平易な英文でわかりやすく説明する。

Oral Introduction の後に内容確認のための Test Questions をする訳だが、あくまでも生徒の理解度を確認するためのものである。Wh-questions よりも単純な Yes / No questions の方がよいだろう。

(2) 音声教材の利用

付属の音声教材を利用する場合には、概要の理解から細部の理解を問う Listening tasks を考え、何度も聞かせる必要がある。例えば、1 回目の聞き取りでは、場面やだれとだれの会話なのかなどを聞き取らせる、2 回目の聞き取りでは話題の概要を聞き、3 回目の聞き取りで具体的内容について問う、という発問にすべきである。

おわりに

題材内容の導入に限らず、リスニングの言語活動を行う場合には次の点に注意したい。

(1) Pre-Listening の重要性

生徒に英語を聞く必然性を理解させる。「これから聞く英語を注意して聞きなさい」と指示するだけでは、生徒は一体何に注意して聞けばよいかわからない。生徒にこれから聞こうとすることに対して興味を喚起すると同時に、内容に関して生徒が既持っている知識を活性化させたり、内容に対する予測を立てさせるような発問を教師がするなど、Pre-Listening の活動が非常に大切である。

(2) 理解を助ける絵や写真の活用

英語を聞くだけでなく、効果的な絵や写真の利用は大きな効果をあげる。デジタルカメラの活用や、インターネットでの情報収集、プレゼンテーションソフトの利用など、様々な可能性を考えることは実に有益である。

特集 リスニングからの導入

リスニングによる 言語材料の導入

根岸雅史

(東京外国語大学)

1. 言語材料の導入

中学の英語教育では、「聞くこと」「話すこと」を中心とした指導が行われており、言語材料の導入をリスニングにより行うのは、極めて自然なことに思われる。新教材の導入を考えた場合、規則の説明から入り、その規則の実例を示していく方法と、実例をたくさん示して、そこから規則を導いていく方法とが考えられる。前者を「演繹法」といい、後者を「帰納法」という。「演繹法」では、生徒に手っ取り早く規則を与えられるが、その規則はレディー・メイドである。それに対して、「帰納法」では、学習者はいくつもの実例の中から自ら規則を発見していくことになる。新教材の導入にあたり、演繹法をとるか、帰納法をとるかは、一般的には、この規則の発見のプロセスに価値を見いだすかにかかっているが、自然な言語習得においては、まさにこの発見のプロセスこそが重要かつ不可欠な一段階なのである。だとすれば、新出の言語材料の導入にあたっては、リスニングにより帰納的に導入するのが望ましいと考えられる。しかも、こうすれば、その後のスピーキングへの展開もスムーズに行うことができる。

2. リスニングによる言語材料の導入の実際

では、リスニングによって言語材料を導入するとは具体的にどういうことであろうか。言語材料の導入であるから、新しい言語材料がリスニングに入ってくることになる。言語材料といった場合、広くは語彙や表現なども含まれるわけであるが、以下では、言語材料を「文法事項」にしぼって議論する。新しい文法事項を英語の音声を使って帰納的に導入する場合は、新しい文法事項が持つ言語的な機能を生徒

が推察できるようなお膳立てをしておかなければならない。つまり、教師が絵や実演などを使って新出文法事項を含んだ文を導入することで、生徒が新しい文法事項の機能を推測することができるようにしておくのである。この場合、導入する文で用いる単語は、すべて生徒が知っている単語でなければならない。

ここでは、比較級の導入について具体的に考えてみよう。導入する新出文法事項が、形容詞に -er をつけて作る比較級を含んだ文だとすると、次のような文を導入に用いることになる。

My pencil is longer than yours.

おそらく、この文の導入にあたっては、長い鉛筆と短い鉛筆を別々に示しながら、

My pencil is long.

Your pencil is short.

と言った後に、2本の鉛筆の長さを比べながら、

My pencil is longer than yours.

と導入することになるのではないか。

もちろん、My pencil is long. の long は「有標 (marked)」であり、My pencil is longer than yours. の longer は「無標 (unmarked)」である。つまり、無標の longer を使っている場合は、絶対的に長いものでなくても、「相対的に」長ければよいのである。したがって、この点にこだわるのであれば、定規を使いながら、それぞれの鉛筆の長さを確認して、

My pencil is 10 cm long.
Your pencil is 8 cm long.

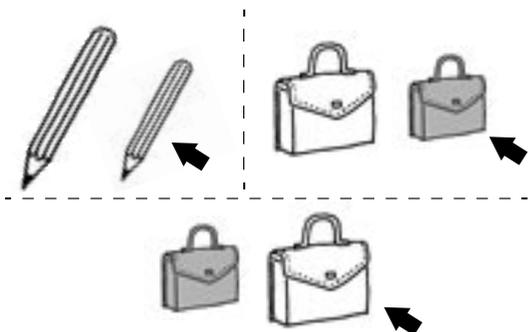
と言った後に、2本の鉛筆の長さを比べながら、

My pencil is longer than yours.

というように導入することになるだろう。

いずれの導入法にしても、具体的に2つのものが比較されていて、どちらが長いかは生徒はわかっている状態である。しかも、ここで使われている単語はすべて既習の単語であるとするならば、longer than ... の意味を推測することができるはずである。

このような導入が済んだところで、理解の確認を行う必要がある。例えば、次のような絵を用意しておいて、英語を聞きながら、どの絵のことを言っているか確認させるのである。絵は、次のようなものである。



これらの絵を見ながら、次のような英語を聞いて、その内容に合った絵を探させるのである。

My pencil is shorter than yours.

My bag is larger than yours.

My bag is smaller than yours.

このようなプロセスを経ることで、生徒は2つのものを比較するときには、形容詞に-erをつけるということ、何と比べるかを示すときには、thanをつけるということなどを発見していこう。

3. 型の練習への展開

こうして音声で導入されていると、話す活動への

移行もスムーズに行うことができる。今度は、始めの鉛筆2本の比較を行いながら、

Teacher: My pencil is longer than yours. Repeat.

と言って、生徒に繰り返させる。そして、3つの絵を見ながら、次のようなキューを出して文を言わせていくのである。

Teacher: pencil ... short

Students: My pencil is shorter than yours.

Teacher: My pencil is shorter than yours.

Students: My pencil is shorter than yours.

Teacher: bag ... small

Students: My bag is smaller than yours.

Teacher: My bag is smaller than yours.

Students: My bag is smaller than yours.

Teacher: bag ... large

Students: My bag is larger than yours.

Teacher: My bag is larger than yours.

Students: My bag is larger than yours.

4. 「素振り」を終えたら

ここまで来れば、新しい文法事項についての「型」の訓練は終わりである。このような訓練は野球やテニスで言えば「素振り」のようなものである。この段階の自動化を終えて、初めて「生きた球」を打つ練習に入れるのである。こうなれば、「意味」に焦点を置いて、インタラクションを行ったり、自己表現を行ったりする準備ができていのである。

最近では、コミュニケーション活動が奨励されるせいか、この「型」の練習の段階を充分経ないままに、導入からいきなりコミュニケーション活動に入る授業をよく見かける。しかし、その多くは時期尚早で、実際に使おうとして生徒がつまづいているのである。自分のバットやラケットをきちんとコントロールするという「基礎・基本」が身につけて初めて、生きた球を打つ楽しみが得られるのである。

Team-Teachingの基礎・基本2

ALTとともに鍛えたい力①

—生徒を引きつける英語のインプット—

渡邊時夫 Watanabe Tokio
(清泉女学院大学)

Team-Teaching では ALT と JTE の役割分担を明確にし、2人の「授業の型」を作り上げることが重要である。

1 授業の導入部分について

分担を明確にするために、ALT と①と②を約束しよう。①と②では、題材やテーマの選定は事前に両者が話し合っただけで決めることが前提である。授業では、ALT が task の説明や話題提供の役を引き受ける。JTE は、response のモデルを示したり、ALT のインプットを繰り返したり、一層具体的な表現に変えたりする。(同じ message を発想や表現法を変えて提示することは T-T の大きなメリットである。)

q 単語レベルの response を求める game や task で授業を始める (5 分以内)。その日の学習に関係のある題材を取り上げる

NEW CROWN BOOK 2, LESSON 8 (Computer Communication) は、moas, ostriches などの鳥が話題になっている。そこで、上記2種の鳥に加え、swallows, crows, hawks, cranes, sparrows, robins, humming birds など生徒が知っていそうな鳥の一覧表を配布して、次の指示 (a ⇒ b ⇒ c) を英語で与える。

(a)

ALT: You see the names of many birds. Please underline those birds whose names you know in Japanese.

JTE: (上記の第2文は難しいので、言い換える— (i) 発想を変える, (ii) 抽象から具体へ) What is the Japanese word for ostriches? 「ダチョウ?」 Right. You know the word in Japanese. So please underline the word 'ostriches'. Do you know the word 'peacocks' in Japanese? No?

Then you cannot underline the word.

JTE は生徒達が理解できたタイミングを見計らって黒板に、swallows, hawks, peacocks, crows などのように「解答のモデル」を示す。

(b)

ALT: How many words did you underline? (Five, Six, Seven ...?) ⇒ Put the number in the right-hand corner on the top of the paper.

意表をついた課題を与えると生徒は考える。JTE は、タイミングを見計らって解答のモデルを示す。

(c)

ALT: Now, make a new list of the birds. This time, put the birds in the order of the size.

JTE: (具体化したインプットを工夫する) Put the largest bird first, next the second largest. The smallest bird will be last word of the list.

ALT は What bird comes on the top of the list? という月並みな質問でなく、What is the first letter of the first bird? など、常に新たな発想で生徒に迫ることが望まれる。例えば、What bird? ならば、ostriches, What letter? ならば、o という具合に、要求に適確に応ずる態度と力量を日常的に育成することが望ましい。

(注) (a) ⇒ (c) のように、生徒にわかりやすい英語のインプットが供給できるよう ALT と JTE は、呼吸を合わせる (型をつくる) 努力が期待される。

w 中学生の年齢や知的レベルに合った topical なテーマを取り上げ、易しい英語で語りかけ、考えさせる

これは毎授業の初めに扱うとよい。生徒も授業の流れを予測するだろうし、2人の教員もインプットの使い方が向上する。例えば「7月9日に、曾我さんの家族がジャカルタで交流できた」というニュースは典型的な topical news である。

ALT: After a 21-month separation, Hitomi Soga, 45, was reunited in Indonesia on Friday with her American husband and their two daughters. Soga met her family at the airport, and kissed all of them with tears in her eyes. (from Indonesian Newspaper) I saw the news report on TV and I was excited. How did you feel?

JTE: (言い換えたり、発想を変えてインプットする) Soga-san met her family again in Indonesia. Soga-san hasn't seen them for almost two years. When she met her family again, she was crying. John (ALT) was excited to see their news on TV. How did YOU feel?

応答の仕方を示す。例えば, excited, happy, unhappy, sad, angry, sorryなどを板書し、生徒に選ばせることが考えられる。

2 授業の理解の部分について

新しいレッスン(セクション)の内容に触れる部分では、ALTには、いわゆる speculate の部分を担当してもらうことにする。Speculateは、テキストの中身と関連づけながら生徒の知識や考える力を引き出すことを狙いとする。JTEは、どちらかと言えば Fact-Finding Questions 的な部分を担うこととする。ALTには Speculate の意味と、互いの役割をしっかりと理解してもらう。Speculate の案を事前に考えてくるよう約束する。(この段階でも、JTEは task の解決法について、生徒にヒントを与えながら response のモデルを提供する。)

q NEW CROWN BOOK 2, LESSON 8

Do you know about moas? They were very large birds. They were larger than ostriches. They lived in New Zealand. But they are all dead now. I used the Internet to find this information. It took only a few minutes.

JTEは(一応内容を理解させた上で) Q & Aを行う。主として下記のような質問になるだろう(解答はすべてテキストにそのまま出ている)。

- Which was larger, moas or ostriches?
- In what country did moas live?
- What did Meiling use to find the information about moas?

ALTが、例えば下記の(speculateの)質問を用意

できたら合格。これには相当の訓練と努力を必要とする。()内は解答例。

- How tall are ostriches? Choose the right answer. ① 1.5m, ② 2.5m, ③ 3.5m (③)
- There are some ostriches in Japan. What part of the world are they from? (Africa or Arabia)
- Their eggs are very strong. How strong is their egg? Is this statement correct?
"A heavy man can stand on it and it won't break."

さらに続けて、

ALT: (JTEに向かって) Meiling uses Internet to find more information about moas. What will YOU do to find more information about ostriches?

JTE: I'll go to the school library.

ALT: Excellent idea.

生徒からは、次のような responses が期待できる— go to a big zoo, go to a bookstore, ask (or call) a science teacher, ask my father, go to (call or write to) a museum, read an encyclopedia など。

w Speculate をさらに発展させて

セクション2に、The Internet is the fastest and the easiest way. という内容が出てくることを予測して、次の問いかけ(task)へと発展してもよい。

JTE: John先生と私の対話を参考にして、黒板の表を埋めてみよう。

ALT: You know many ways to get more information about ostriches. Which one is the best way? And tell me the reasons too.

JTE: (解答のモデルを示す) I think the library is the best. Because there are many good books and books are free. You don't have to pay any money. (Redundancyの活用) John, what do YOU think?

ALT: Well, I think the bookstore is the best, because you can get the best book there. The school library may not have the best book.

The best way	Your reasons
Library	
Bookstore	
Science teacher	

今回述べてきた活動を着実に実行すれば、ALT、JTEともに「わかりやすく、魅力的なインプット」を与えることができるようになる、と思う。次回は、「発展の部分」について述べる。



気になるテスト作り

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

観点別・絶対評価が中学の英語教育に導入されてからしばらくは、絶対評価とは何か、それぞれの観点では何を見るのかといったことが多くの英語教師の関心事であったような気がする。ところが、今年に入って、その関心は、観点別・絶対評価での「テスト」の在り方に移ってきているようだ。評価の枠組みは変わったのに、テストは変わらない——この矛盾に英語教師が気づき始めたのかもしれない。

そこで、今回は、観点別・絶対評価の枠組みにおいて用いられている英語のテストが、どんな問題点を抱えているのか、そのいくつかに焦点を当て、考察する。

1. 設計図のないテスト

まず、「もの作り」の一般的な手順を考えてみよう。作ろうとするもののコンセプト形成から始まり、それを具現化するための設計図の作成を行う。そして、場合によっては、それをもとに試作品が作られ、最終的なプロダクトに至る。家作りにしても、車作りにしても、こうしたプロセスをたどり、ものが作られていく。いい「もの作り」のために、とりわけ重要なのが設計図の作成である。家の設計図もなしに、窓を作り始めたりすることはないし、車の設計図もなしに、ドアを作り始めたりすることもない。

ところが、これがテスト作りとなると「設計図」の作成を行わない人たちがあまりにも多い。テスト作りでは、多くの人々が、まず問題を書くことから始めているのである。どんな全体像のテストとなるのかもわからずに、個々のテスト項目を作成している。こうして作られるテストは「英語力」をただ漠然と測っているだけであり、観点別・絶対評価においては意味がない。

言語テストの場合は、全体図を描いた「設計図」のことを test design と呼び、そのパーツの詳細についての取り決めを書いたものを test specifications という。ここにはおよそ以下のような事柄が含まれることになる。

- ・評価計画に沿ったテストの役割についての記述
- ・そのテストで測ろうとする能力や知識のリスト
- ・それぞれの能力や知識をどのような方法で測るかについての記述
- ・リーディングやリスニングでは、どのようなテキストを用いるかについての記述
- ・それぞれの小問に必要な小問の数
- ・それぞれの小問の重みづけ（配点）
- ・それぞれの小問の重みづけ（配点）
- ・採点基準

定期試験などでは、少なくともこのようなことを決めずに、実際の問題作成に入るべきではないと考える。これが proficiency test ともなれば、これ以外にも、使える単語や文法項目・言語機能などのリストも確定しておく必要がある。

このような「設計図」を作ることで、テスト作成者は、自分の指導の中で何が重要で、それをどの程度まで身につけていることを生徒に期待しているのかを考えることになる。明確な「設計図」があれば、何の能力（または、知識）を測ろうとしているのかわからないような問題はなくなるはずである。

2. 「総合問題」の意味

観点別・絶対評価にあっては、ある到達目標に照らして、個人がその目標に到達しているかどうかを見ることになっている。したがって、何の能力（または、知識）を測っているのかわからないようなテ

スト問題は、観点別・絶対評価にあつては、上に述べたとおり、利用のしようがない。この意味で、観点別・絶対評価になってまずその存在意義がなくなるはずであったのが、いわゆる「総合問題」であるが、この「総合問題」は定期試験からいまだに消え去ってはいない。ご存じの通り、「総合問題」では、あるまとまった英語の文章が提示され、その中にある単語の発音を問うたり、単語の意味を問うたり、文法事項を問うたり、文章の内容を問うたりしている。このように、「総合問題」にはばらばらのテスト・ポイントが含まれているために、その結果の意味を解釈することは難しく、その得点は、観点別・絶対評価の枠組みでは行き場を失うのである。

往々にして、この「総合問題」の得点は、「理解の能力」として扱われていることがあるが、その中身を見れば、「理解の能力」を測っているわけではないということは明らかである。とりわけ定期試験における「総合問題」では、文章の内容理解を問う問題の比率は意外と少なく（まったく含まれていないこともある）、用いている文章は「総合問題」を「理解の能力」のテストとするための見せかけにすぎない。

3. 文法問題

観点別・絶対評価においては、こういった能力や知識を測っているかが明確になっていなければならないのは、いわゆる「文法問題」でも同じである。一般に、「文法問題」は、「総合問題」とは異なり、1つの大問の中に様々なタイプの問題が含まれているようには見えない。それは、「文法問題」は、それぞれの大問における問題形式がたいして統一されているからである（例えば、「空所補充問題」「並べ換え問題」「適語選択問題」という具合である）。しかし、それが実はくせ者である。「問題形式」が統一されているからといって、「テスト・ポイント」が統一されているわけではないのである。例えば、すべてのテスト項目が適語選択問題であっても、動詞の時制を問う問題が入っていたり、前置詞を選ぶ問題が入っていたり、単語や熟語の知識を問う問題が入っていたりすれば、この大問の結果から、生徒が何ができて何ができていないのかは見え

てこない。また、同じ並べ換え問題でも、あるところでは句の内部構造を問うているのに、あるところでは内部構造は問題にしていないといったようなことがある。となれば、こうした大問の出来から、生徒の文法知識を的確に診断することはできないのである。さらに、この種の文法問題から導き出される診断コメントは、たとえば「空所を補充する能力がある」とか「正しい語を選ぶ能力がある」などとなってしまい、およそ英語の指導目標からはかけ離れてしまう。これでは、このテストに適切な診断機能を期待することはできないのである。「文法問題」では、「問題形式」をそろえるだけでなく、それぞれの大問で、文法のどのような知識を測りたいのかを明確に意識する必要がある。

4. 厄介な「線引き」

観点別・絶対評価における評定の出し方については、本誌 Vol. 4 において取り上げたとおりである。相対評価では、合計点を出して、それを上から5段階の比率にあわせて割り振っていけば、評定が出た。これに対して、観点別・絶対評価では、それぞれの観点ごとに、基準に達しているかについて判断しなければならない。しかしながら、その基準の決定は恣意的である。例えば、基準を5割とするのか、6割とするのかなどは、教師自身が決めたり、学校で統一の基準があったりする。観点別・絶対評価にテストを用いた場合には、この基準に合うようにテストが作られていなければならない。実際、基準の「線引き」の作業は、テストの難易度とも絡んで、かなり厄介な作業である。たとえ同じ実力・同じ「線引き」であっても、テストが易しければ基準に到達しやすくなるし、テストが難しければ基準に到達しにくくなる。また、TFで理解を問うような問題であれば、「鉛筆を転がしても」5割は正解することになっており、これをもって基準に達しているとは判断すべきではない。いくらいいテストを作っても、この「線引き」のさじ加減1つで、結果は大きく異なってきてしまう。今までの惰性に流されることなく、一度立ち止まって自分の「線引き」の妥当性を検討してみたいかだろうか。

「話すこと」の 指導と評価 [2]



—指導と評価に役立つ Speaking Test—

原田 尚孝 Harada Naotaka (熊本市立京陵^{ひやまや}中学校)

はじめに

英語の4技能の中で、生徒の「話すこと」への興味・関心は高いものがある。私は日々の授業で行っている speaking の活動をj確認する意味で、毎学期末に Speaking Test を実施している。今回は3年生を対象に、平成15年の1学期に前任校で実施したテストについて報告する。

Q2 Could you tell me the way to ()?
the post office / the hospital / the bank / the library / the Ball Park / the restaurant / the City Hall / the Central Park / the station / the flower shop

[Q2 で用いた map]

① Speaking Test の概要

(1) 目的

生徒のスピーキング能力を、評価基準を明確にして適切に診断し、その結果を分析して指導に生かす。

(2) 時間及び範囲

1人2分程度で今まで学習した文法事項から出題する。

(3) 方法

ALT と生徒との1対1の面接形式とする。

(4) 問題内容及び手順

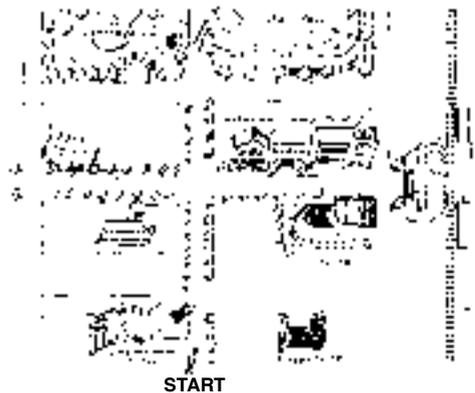
問題は合計5問で、内容及び手順は以下の通りとする。また実施の際には、同じ形式、難易度の問題を数種類作成し、順不同で生徒に実施する。

- ① あいさつをし、名前と番号の確認をする。
- ② (Q1) 現在完了形・経験の質問に答える。(Yes, No の答えの後に関連する1文を必ず付け加える。)

Q1 Have you ever been to ()?
a foreign country / a sumo tournament / a concert / kabuki / Kyoto / Okinawa / Hokkaido / Tokyo / Kurokawa hot spring / Mt Aso

(ALT は上の中から任意の1つを選んで質問する)

- ③ (Q2) 地図を見て、道案内をする。



[NEW CROWN 3, LET'S TALK 3, PRACTICE PLUS より]

- ④ (Q3) ALT への質問1
- ⑤ (Q4) ALT への質問2
- ⑥ (Q5) ALT への質問3

Q3 ~ Q5 は、ALT からの Please ask me three questions about ~ . を聞いて、3つ質問する。3つのうち1つは Yes / No question, もう1つは Wh-question とし、3つめはどちらで質問してもよいこととする。

Q3~5 Please ask me three questions about ().
my brother Steve / next weekend / my father / my mother / my best friend / my hobbies / my pets / my last summer vacation / this summer vacation / last weekend

⑦ 挨拶をして、終了する。

(5) 評価

評価基準及び評価方法は以下の通りとする。

A ... no mistakes, excellent volume, response time and eye contact etc. (Excellent)

B ... a few small mistakes, but generally good (Good)

C ... doesn't respond, fails to communicate, can't understand any questions (Poor)

J: (Q5) Have you ever been to a sumo tournament?

A: Yes, I go every year to the Kyushu tournament in Fukuoka, and I went to Ryogoku-kokugikan once too.

A: OK. Good job. Thank you. Good by.

J: Thank you very much. Good by.

(2) 生徒の実際のテスト例

実際のテスト例を示す。(なお、最初と最後の部分は省略し、テストの問題部分のみ掲載)

【評価方法】 1問ごとに a (3点), b (2点), c (1点)

で採点し、合計 15 点満点とする。評価は A → 15 ~ 12 点, B → 11 ~ 9 点, C → 8 ~ 3 点とする。

【テスト例 1】 (A= ALT, S= Student)

2. Speaking Test の実際

(1) 生徒に例示したモデル

テスト実施前に ALT と JTE で行ったモデルを示す。

(A=ALT J=JTE)

A: Hello. Good morning. How are you?

J: I'm fine, thank you. And you?

A: Very good. Please tell me your name and number.

J: My name is Naotaka Harada. My student number is 18.

A: (Q1) OK. Let's start. Have you ever been to a foreign country?

J: No, I haven't. I want to go to America some day.

A: (Q2) Can you tell me the way to the library?

J: Sure. (地図を見ながら) Walk along this street and turn right at the second traffic right. It's between the restaurant and the hospital.

A: Please ask me three questions about my hobbies.

J: (Q3) What is your hobby?

A: My hobby is watching sumo.

J: (Q4) Who is your favorite wrestler?

A: I like Asashouryu the best. He is small, but tough. He never gives up.

A: Have you ever been to a concert?

S: Yes, I have. I enjoyed it very much and I was excited.

A: Could you tell me the way to the Ball Park?

S: I see. Go along this street and turn right at the third corner. It's on your left.

A: Please ask me three questions about my father.

S: OK. Does your father like listening to music?

A: Yes, he does. He likes classical music.

S: Oh, I see. Ah, where does he live now?

A: He lives in Erie, Pennsylvania.

S: When is your father's birthday? Do you remember?

A: June 7th.

S: Oh, it's near my mother's birthday.

A: Really? OK. Good job.

【テスト例 2】

A: Have you ever been to Hokkaido?

S: No, I haven't. But I want to visit there some day.

A: Could you tell me the way to the hospital?

S: Sure. Go straight along this street and turn right at the second corner. It's on your left.

A: OK. Thank you. Ask me three questions about my pets.

S: Do you have a pet?
A: Yes. I have two turtles.
S: When did you buy them?
A: A few years ago.
S: Do you like pets?
A: Of course, I do.

【テスト例 3】

A: Have you ever been to Kyoto?
S: Yes, I have. I've been to Kyoto in our school trip.
A: Could you tell me the way to the restaurant?
S: Go straight along this street and turn right at the second traffic light. It's on your left.
A: Very Good. Ask me three questions about my best friend.
S: What is your best friend's name?
A: His name is Mike.
S: Does he have a sister?
A: No, he doesn't.
S: What do you talk with him?
A: We talk about many things.

【テスト例 4】

A: Have you ever been to kabuki?
S: No, I haven't. I've never been to kabuki.
A: Could you tell me the way to the bank?
S: Sure. Go straight along this street and turn left at the second corner. It's on your right.
A: Thank you. Ask me three questions about my mother.
S: What food does she like?
A: She likes pasta.
S: Is she a kind mother?
A: Yes, she is.
S: What sports does she like?
A: She likes tennis.

③ テスト結果について

(1) 結果

3年生の受験者 156 人のうち、85%が A、13%が B、2%が C という結果であった。

全体的にテスト結果は良好であったが、アンケートの結果、テスト中に緊張したり、問題が難しいと感じた生徒の割合が高かった。また 95%以上の生徒が Speaking Test は役に立つと答えている。

(2) 生徒の感想 (テスト後のアンケートより抜粋)

- ・このテストを受けて、自分が持っている知識がよくなった。緊張しないように自分に自信がつくようになればいいと思う。
- ・とても緊張して、普通なら答えられそうな質問になかなか答えられなかった。
- ・緊張するけど、とても役に立つので、これからも続けてほしい。
- ・すぐくためになる。自分の言ったことが、相手に伝わったときはうれしい。

4. 成果と課題

(1) 成果

① Speaking Test については、生徒は意欲を持って取り組み、「話すこと」の意欲を高める効果があった。さらにテスト方法の改良を重ね、実施していきたい。

② Speaking Test の評価において、コンピュータを用いると、結果を処理したり、テストの画像を取り込んで分析し、フィードバックに用いるなど効果がある。

(2) 課題

① テストの内容、形式等をより一層工夫するとともに、評価の方法も IT をさらに活用して、生徒への結果のフィードバックを容易なものにする。

② 評価の観点として文法事項だけではなく、コミュニケーションに必要な他の要素（「声の大きさ」、「アイコンタクト」、「反応時間」、「理解力」、「流暢さ」）も指導や評価の対象としていく。

③ 日頃の授業においても、「話すこと」に関する活動を工夫し、それらを Speaking Test とも連動させることで、「指導と評価の一体化」を図り、実践的コミュニケーション能力の育成を目指す。

Just Now

英語活動ができる 担任に！

—小学校教員研修の実践例—

三浦邦子 Miura Kuniko
(東京都文京区立誠之小学校)

1. 今、どうしても必要な教員研修

小学校英語が総合的な学習の一環としてスタートして3年。全国的には、88.3%の学校で様々な取り組みの努力がなされている。しかし、各地域や学校に派遣されている外国語指導助手(ALT)だけに頼りがちな活動では、この先息長く継続していくには、限界がある。発達段階や心理的なフォローなどを熟知し、子どもたちをよりスムーズに動かすことができる担任が、英語活動をリードしてこそ、初めて、地に足のついた指導が展開できると言える。

一方で、我々小学校教師にとって、英語教育についての研修を受ける機会は、これまでなかった。英語指導に関するノウハウや、指導技術の研修とともに、ある程度の会話能力、すなわち運用力の研修も急務である。ここでは、本校でのこれまでの教員英語研修の実際を紹介し、研修のあり方について考えるきっかけの1つとしたい。

2. 誠之小学校における教員研修

筆者の学校は、平成9年度から12年度まで文部科学省(当初は文部省)の指定を受け、研究開発学校として英語活動の実践的な指導研究を行い、今日に至っている。言うまでもなく、教員の中に誰一人として英語教育を専門的に学んできた者はいなかった。

しかし、子どもたちを前にして「待った」はない。とにかく、これまで我々が受けてきた英語教育の知識や、先行研究校、民間の児童英語教育の情報などを参考にしながら、実践研究は始まった。そして、英語活動の一方の柱である「カリキュラムづくり」とともに、あらゆる機会をとらえて教員研修を進め

ていくことを共通理解とした。

英語指導力と英語運用力を、それぞれに分けて研修することは、理想ではある。しかし、それらにかかる時間があまりにも膨大で、現場で日々多忙を極める教師には、望むべくもない。

そこで、本校では、指導技術の研修をそのまま運用力の研修の機会ととらえ、ときにはオールイングリッシュの時間にして、間違ってもいいから自信をもって、コミュニケーションすることの楽しさを、教師自ら体験していくこととした。

(1) 全教員参加の“Seishi English Village”

“Seishi English Village”は、年間2回から3回、研究全体会の1つとして行う、各2時間程度の英語教員研修である。名前の由来は、第1回研修会のテーマからきた。すべての教員が思い思いに、農民に扮しての英語研修であった。

“Seishi English Village”とは、言語文化研究者である阿部恵子先生のご指導で、命名したものである。英語という外国語に触れるときには、「自分の殻を破って、気持ちをオープンにしてやり取りや活動をすることが大事である」という。服装を変えただけで、童心に戻ったり、ちょっぴり大胆になれたり、英語の世界にすんなりと入っていけるから不思議である。

阿部先生に講師をお願いしているが、ときには「ALT」や「英語部の教師」が講師の場合もある。時間内は、「すべて英語で！」を合い言葉に、毎回異なるテーマで、楽しい研修になるよう心がけて、「Seishi English Village」は現在も続いている。

以前、夏休みに行った“Seishi English Village”は、

DVD鑑賞をテーマにした研修であった。映画“My Fair Lady”の名場面を、字幕なしで聞き取って、役割を変えて演じたり挿入歌を歌ったりしながらの楽しい研修となった。このほか、様々なゲームや歌、チャンツを体験することも楽しい研修になる理由の1つとなっている。

また、各学年の英語活動を紹介し合って、実際に活動することも、テーマの1つとして取り上げた。「学年を追って英語活動をとらえることができる」、「指導者と子どもの両方を経験できる」など、“Seishi English Village”は、英語指導力、運用力向上の何よりのよい機会となっている。



“Seishi English Village”の一コマ

(2) ミニミニレッスン

伝達などがたくさんある、朝の慌ただしい職員室のひとつときであるが、ALTからのアドバイスをもとにして、みんなで声を出す機会を週に1度、2～3分で実施しているのが、このミニミニレッスンである。英語力のブラッシュアップ研修になると同時に、「さあ、がんばるぞ!」と、一日の始まりに、元気をもらうきっかけになる。

「あいさつ」「ちょっとした文化の違い」「ニュースや新しい話題から」など、身の回りの出来事は何でも題材にすることができる。

我々の陥りやすい英語の間違いなどもALTの目線で取り上げ、なるほどと納得させられることが多い。冠詞aやtheの使い方、否定疑問文に対する答え方での“Yes”“No”の日本語との違いなど、実際にすぐに役に立つような事例をテーマに行っている。

(3) ミーティングの時間の活用

英語活動は、学年共通の指導プランを使って、ティーム・ティーチングで行うことが多い。そのため、活動前には、学年の担任やその他の協力者との事前の打ち合わせを、欠かすことができない。

担任が立てた基本的なプランをもとにして、ALTも加わり、じっくり吟味することで、指導に対する見通しが、よりはっきりしてくる。実際に、声のかけ方や教材・教具の提示の仕方などいろいろ試すことで、指導に自信をもつことができる。こうして、互いの知恵を寄せ合い、プランに息を通わせることが、指導力の向上に大いに役立っている。ALTへの説明や質問なども、できるだけ英語で行うことが、英語運用力を高めることになるのは、言うまでもない。

ALTを、私たちと同じ目標をもつ1人の仲間と考え、「ブロークンな日本人英語でも十分」、そう開き直って、ALTとのコミュニケーションを楽しむことにより、職員室が「生きた英語研修の場」となっている。心を通い合わせた交流によって、ALTの持ち味を生かすこともでき、英語活動がさらに充実してくるであろうと考えている。

3. これからの教員研修のあり方

本校のように、研究指定校の立場を生かして全職員一丸となって教員研修を実施できるところばかりではない。今後、どの学校でも、全教員が行わなければならない英語活動の必修化も視野に入れると、文部科学省や教育委員会レベルでの研修会は、欠かすことができない。ぜひ、1人でも多くの教員が研修の機会を得て、自信をもって子どもたちの前に立つことができるようなシステムづくりを要望したい。

それと同時に、個人の努力も大事である。各研究校の実践に触れる機会は、非常に有益である。各学校なりの研究を積み重ねて作り上げた活動の流れを、実際に目にするによって参考となるものは多い。参観して得た成果の中から、「やりたいこと」や「やれそうなこと」を想定し、同じ指導案で試してみたり模倣したりして、指導力の向上に結びつくよう、さらに研修を積み重ねたい。

Language and culture: Teaching methods and materials

Thomas Hardy
(Keio University)

When teaching an international language such as English, teachers must consider the characteristics of such a language, the role culture plays in teaching, and language teaching in specific, the role language plays in the cultural expressions we make, and, the role the teaching materials and methods we use. These materials and methods, as McKay (2003) makes clear both have differing and important impacts of language acquisition.

Three basic types of materials can be used in language textbooks, according to Cortazzi and Jin (1999): source culture materials, target culture materials, and international materials.

The first is source cultural material. This draws on the learners' own culture as content. In the case of Japan, this would involve using mostly materials that are based on Japanese society and culture, and thus inherently familiar to the learners.

The second source of materials is from the target culture, drawing on the culture of a country in which English is spoken as an L1. In this case, students would spend most of their time reading and learning about life in native-English speaking countries, such as the United States, Great Britain, and Australia.

The third type is international target culture material, which uses a wide range of materials from a variety of cultures in English- and non-English-speaking countries around the world. For example, in this case, students in Japan might have a lesson in English in which the focus was deforestation of the rainforest in Brazil.

Source culture material is the primary emphasis on many existing English textbooks. However, one of the major goals of teaching English as an international language is to make it easier for learners to communicate their ideas and cultural understandings in the medium of English. That being the case, there are many reasons why source culture materials should be used. This is the general principle informing the selection of materials in *New Crown*.

Materials must be married to methods, which is another area of language teaching that reflects the perspective of each culture. Communicative language teaching (CLT) is one of the most popular teaching methodologies in

use today. It was first used largely in English speaking countries to help non-English speaking immigrants learn English and adjust to their new country. As a result, CLT emphasizes the importance of oral skills and group work and assumes the presence of a largely English social and cultural environment. Three factors are at work here which raise questions as to whether CLT is appropriate in other contexts.

The first is the assumption of a largely English environment. In most countries of the world, this is simply not the case. English is clearly a foreign language, and the extensive out-of-class English exposure can simply not occur.

The second is the related emphasis on oral skills. In some countries, such as Chile, China, and Korea, for example, the focus on speaking and listening may simply not be appropriate to the needs of learners. In these contexts, an emphasis on reading and writing skills might be better.

The third is the emphasis on group work. In some cultural contexts, this may be appropriate. In others, it may not, and may even prove counter-productive.

The point is, teachers must consider their particular context when selecting a methodology, not simply rely on the advice of experts with experience in another cultural context.

In short, English has become an international language, with all that involves in terms of culture, language, and teaching. This requires a serious rethinking of the links of English-speaking and non-English speaking countries. It requires recognition that, to a large extent, English has become denationalized. This means that teachers, at as local a level as possible, make decisions that are appropriate so that learners will be able to use English to tell others about their own culture.

References

- Cortazzi, M. & Jin, L. (1999). Cultural mirrors: materials and methods in the EFL classroom. In E. Hinkel (ed.), *Culture in second language teaching* (pp. 196-219). Cambridge: Cambridge University Press.
- McKay, S.L. (2003). The cultural basis of teaching English as an international language. *TESOL Matters* 13 (4): 1,6.

「超録」を使って スピーキングテスト データ管理

今井裕之 Imai Hiroyuki
(兵庫教育大学)



HDD長時間録音機「超録」のメイン画面 (<http://pino.to/choroku/capture.html>)

スピーキングテストを実施する人が増えているように思う。「実践的コミュニケーション能力」という教育目標を考えると望ましいことだが、実際、テストの考案・準備・実施から、しっかりした基準での評価、生徒に役立つフィードバック、事後のデータ管理までを考えると、つい二の足を踏んでしまう人も多いと思う。

データ管理が苦手な人にとっては、生徒のスピーチなどをテープやビデオに録って棚に並べるうちに膨大になり、だれのデータがどこにあるのかわからなくなってしまったケースもあるのではないだろうか。第一、保管場所も相当必要なうえに、テープだと再生の際の頭出しが難しい。そんなデータ管理の悩みを解消し、いつでも簡単に個々の生徒のデータにアクセスでき、授業でのスピーキング指導に生かすことができるソフトが、今回ご紹介する「超録」である。

「超録」は、スピーキングテスト開発の共同研究を行っている荒井慎也先生(岡山城東高校)に紹介してもらった、パソコンに音声を録音するソフトなのだが、そのメリットとして、

- 1) 操作が(比較的)簡単
 - 2) データファイルが小さめ(6分間のデータで2.4MB!)
 - 3) MP3(ファイル形式)で録音でき、再生メディアも多様
 - 4) フリー版もある
- などが挙げられる。

スピーキングのテスト方法もさまざまだが、教師からの質問や絵、文字などの「キュー」を与えて、

生徒の発話を引き出し記録するのが一般的な方法だろう。例えばこんなやり方はどうだろうか。まず、生徒の発話を「超録」で録音する。これをパソコン上で再生しながら、ファイル管理ソフト(ファイルメーカーなど)で作った個人レコード画面に、発話を書き起こす。大変そうに思われるかもしれないが、中学生の発話速度ならば、たいていはタイピングの方が速いので聞きなおす手間はなし、なにより生徒(と自分)の英語力がひしひしと伝わる貴重な体験になる(生徒自身に書き取らせることも可能かもしれない)。レベル評価や生徒へのコメントを書きこみ、さらに音声ファイルを貼りつければ、その生徒のスピーキング力をぎゅっと「真空パック」できる。出来上がったレコードを使って、音声、スクリプト、評価、コメントを提示しながらフィードバックすれば、A,B,C評価だけの場合と違い、その鮮度、きめ細かさは遥かに高いであろう(よいフィードバックには、確かな評価尺度が不可欠だが)。

スピーキングは、たとえテストであっても教師にも生徒にも楽しいものである。時間は多少かかるが、毎週するわけではなく、半年か一年に一度くらいが「伸び」を実感できる適度なインターバルだろうと思う。それくらいの頻度なら、と思える人にはぜひ試してみてほしい。どんな外部テストにも劣らぬ教育資産になるはずである。

この「超録」は、ウェブサイト(<http://pino.to/choroku/>)からダウンロードできる。ウインドウズ版しかないが、MP3で録音すれば、あとはMac or Windowsである。なお、貴重かつ個人的なデータだけに、バックアップと流出防止には細心のご注意を。

中学校英語運用能力テスト J.A.C.E. (ジェース)

2002年度から英語教育を取り巻く環境は大きく様変わりしました。公立中学校では、英語の授業時間が週4時間から3時間と少なくなる一方で、「聞く、話す」といったコミュニケーションの能力がより重要視されるようになりました。また絶対評価が導入され、そのための評価の規準作りが求められるようになりました。そのような情勢の中、設立されたのがNPO法人の英語運用能力評価協会(ELPA)です。そしてELPAが、先生方の指導の一助となるテストを作成しようと考え開発したのがJ.A.C.E.です。

J.A.C.E.の特徴は、3つのレベルが設定されていることです。中学生の場合、未履修の言語材料や語彙があると問題を解く上で大きな障壁となってしまいます。その点J.A.C.E.は、学校での既習事項に準拠した内容で、生徒が無理なく受験できます。

レベル1は中学2年の1学期修了の範囲で、言語材料にはbe動詞の現在形・過去形、一般動詞の現在形・過去形、現在・過去進行形、命令文、be going to～、助動詞のcanなどが入ります。

レベル2は中学2年の2学期修了の範囲で、不定詞、動名詞、

There is [are]～..一般動詞を使ったSVCの文、目的語が2つあるSVOCの文、that・when節、助動詞のmust・may・will・shallなどが含まれます。

レベル3は中学3年1学期修了の範囲で、現在完了、比較、受動態、if節、助動詞のwould・shouldなどが入ります。(レベル2にはレベル1の言語材料、レベル3にはレベル1、2の言語材料が含まれます。)

それぞれ各学期・学年末の実力テストや学期・学年初めの習熟度判定、運用能力の評価にご活用いただけます。

次に、スコアは項目応答理論に基づく採点方式で、目標達成度と運用能力を正確に測定します。従来の素点方式とは異なり、受験者の能力値をスコアに換算する方式を採用しているため、絶対評価のスケールとして利用することが可能です。また今までのテストでは見えにくかった潜在的な能力、例えば精読は苦手だが必要な情報を読み取る力は強い、あるいは単語レベルの聞き取りは得意



ではないが話の流れをつかむのはうまい、といったこともわかります。生徒にとってプラスの評価は学習のよい動機付けになります。

また評価・学習指導の両面からサポートするために、生徒用には各分野別の点数・評価および学習アドバイスそして、復習ポイントを提示したスコア・レポートを、先生方には教授用資料として問題別正答率・解答傾向、スコア・レベル別指導例など10種以上の資料をご用意いたしました。スコア・レポートでは、得意な部分をより伸ばせるよう具体的な指導アドバイスを載せてあります。

生徒一人ひとりの英語力を正しく評価し、今求められている運用能力を伸ばすためのツールとして、ぜひJ.A.C.E.をご活用ください。

(ELPA英語運用能力評価協会事務局
お問い合わせ:TEL/FAX 03-3230-9237)

■語学教育研究所 2004年度研究大会

日時:10月23日(土)9:45~17:35

場所:神奈川大学(横浜キャンパス)

内容:【午前】贈賞式、協議会1(A:児童英語教育研究、B:授業研究—高等学校英語1)【午後】協議会2(C:会員研究発表、D:教材研究再検討、E:高校英語研究)、公開授業

参加費:4,000円(会員・学生:1,000円)

お問い合わせ:語研事務局 TEL.03-3818-9648/FAX.03-3818-9885

URL:http://www.irft.or.jp/

■第54回 全英連大阪大会

日時:11月12日(金)10:00~17:00/13日(土)9:30~16:00

場所:(12日)近畿大学11月ホール、(13日)大阪府教育センター

内容:(12日)記念講演“English Education for Inter-cultural Communication”新崎隆子(会議・放送通訳者)、中学校・高校授業実演、授業合評会ほか。(13日)分科会①②③、業者展示・業者プレゼンテーションほか。

参加費:6,000円(学生2,000円)

URL:http://www.zen-ei-ren.com/

TEACHING ENGLISH NOW

6号

2004年
10月1日発行
定価80円
(本体76円)

編集・発行人:八幡紘厚
発行所:株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話(03)3230-9422(編集)
振替 東京00160-5-54300
[NEW CROWN ホームページ]
http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html
印刷:三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9
電話(0426)45-6111(代)

編集後記

今号で64回を数える森住衛先生の連載「単語の文化的意味」が1冊の本となりました。本誌『TEACHING ENGLISH NOW』の前身である『ことばと教育』で連載が始まったのが1979年。それから実に25年の歳月が流れました。1つの単語の背後に広がることばの世界を是非お楽しみください。

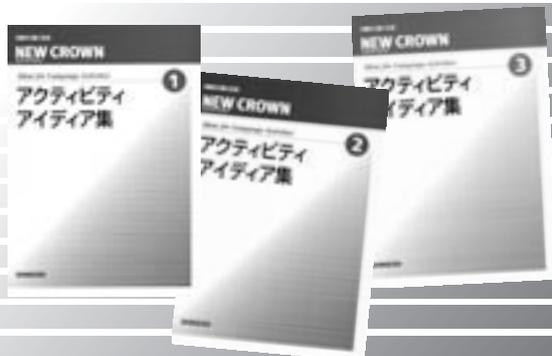
大好評!

ニュークラウン Teacher's Manual 〈別冊〉

アクティビティ アイディア集

① ② ③

各学年
B5判
1,995円



コミュニケーション活動を活性化するための 多彩なアクティビティを収録

生徒が楽しく授業に参加でき、コミュニケーション活動の育成に効果的な指導用教材です。中学校で学習する言語材料に合わせた活動ができるようになっています。すぐに使えるワークシート形式で、評価がしやすい「評価のポイント」や「評価表」付きです。



ニュークラウン生徒用教材〈採用品〉

ワークブック 1・2・3

580円 B5判オールカラー 88頁

学習内容の確認に! 学習の心強いパートナー

セクションごとに語彙・文法・語法などの基本練習を、各課ごとに総合問題を配置。

教科書の題材理解に必要な記事も掲載。



ドリルブック 1・2・3

420円 B5判 48~60頁

ドリル練習で基礎力アップ!

各課の基本文型を1ページに1項目ずつ取り上げ、基礎的なドリル練習ができる。

各課のまとめは単語・語句ドリルと基本文型の発展的ドリルで構成。



リスニングCD 1・2・3

2,100円 12cmCD1枚 テキストB6判 64~72頁

「正しい発音」と「英語を聞く力」をつける!

教科書の本文と単語の読みを、標準的米音で表情豊かに録音。

テキストにはCD用のトラックナンバーとアクセントや注意すべき抑揚などを掲載。



新刊案内

森住 衛 著

単語の文化的意味 ——friend は「友だち」か

2,100円 A5判 256頁

日英比較文化の視点から ことばの深層に迫る

friend や drink など中学校で学習する単語を中心に取り上げ、1つの単語を見開きで解説。ことばの背景にある文化を知れば、英語学習はもっとおもしろくなる。



(表示価格は税込)

小学校英語活動をサポートするテキスト

小学校英語活動用テキスト

KIDS CROWN

キッズクラウン



スタンダードコース / アドバンスコース

■KIDS CROWN 編集委員会 [代表: 渡邊 時夫] 編

総合的なメインテキストとして
聞く活動補強のサブテキストとして
さまざまにご利用いただけます

英語活動の「楽しさ」をサポート!
英語活動の「聞く」を補強!
英語活動の「やさしさ」を演出!
英語活動の「指導のしやすさ」を提供!

スタンダードコース

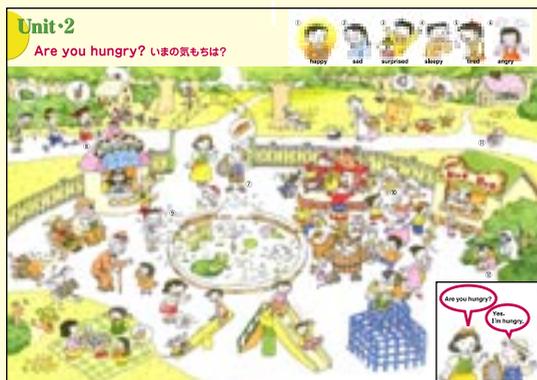
B5判 72頁 定価500円

アドバンスコース

B5判 80頁 定価550円

英語活動はまず楽しくなくてはなりません。そのため本書では、以下の点で英語活動が楽しく展開できるような工夫をしています。

- 子どもたちが喜ぶイラストで、楽しい雰囲気演出しています。
- 楽しい一枚絵《パノラマ》はさまざまな活動に使い、子どもたちを飽きさせません。また歌、クイズ、ゲーム、すごろくなど英語を聞きながら、バラエティに富んだ楽しい活動が盛りだくさんです。



<スタンダードコースより>



<アドバンスコースより>

- コースに合わせたふさわしい題材で、子どもたちの知的好奇心にうったえます。
- つつい聞き入ってしまう楽しいCDで英語の音源を提供しています。

KIDS CROWN 教師用指導書

スタンダードコース 定価 7,000 円 / アドバンスコース 定価 8,000 円 (各CD・ウォールチャート付き)

- 教師用指導書本冊 (各 B5 判 112 頁)
- 付属指導用 CD (スタンダード《3 枚》 / アドバンス《4 枚》)
- 付属指導用ウォールチャート (B 全判 スタンダード《5 枚》 / アドバンス《7 枚》)

(表示価格は税込)

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□ 本 社 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

□ 大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177

□ 名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル4F TEL. 052 (252) 9211・9212

□ 九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532

□ 札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ノヴァ15ビル2F TEL. 011 (616) 8722